

社会心理学における嘘研究

—現状と展望，嘘に対する雑感

文京学院大学人間学部 教授

村井潤一郎（むらい じゅんいちろう）

Profile—村井潤一郎

東京大学教育学部教育心理学科卒業。東京大学大学院教育学研究科総合教育科学

専攻教育心理学コース博士後期課程修了。博士（教育学）。専門は社会心理学，言語心理学。著書は『嘘の心理学』（編著，ナカニシヤ出版），『Progress & Application 心理学研究法』（編著，サイエンス社），『はじめてのR：ごく初歩の操作から統計解析の導入まで』（北大路書房），『発言内容の欺瞞性認知を規定する諸要因』（北大路書房）など。



はじめに

印象に残っている最近の嘘は何だろうか。自分自身に生じた普段の何気ない嘘の多くは忘れ去られるので，組織による隠蔽など，事件性のある嘘が想起されることのほうが多いかもしれない。私たちが普段つく嘘，つかれる嘘の多くは深刻なものではなく社会的な嘘なので（Vrij, 2008など），なかなか記録されにくい。とある同業者の先生が話していた「夫に言った小さな嘘」で印象に残っているものとして，「買った服の数をやや少なめに言う」がある。こうした日常のちょっとした嘘は頻繁に生じているだろう。しかしながら，この種の嘘は嘘研究の俎上にはなかなか載ってこない。

嘘と欺瞞

上記では「嘘」という語を用いてきたが，実際の嘘研究では，用語の揺れがつきものである。「嘘」の関連語として，欺瞞，虚偽，だまし，など様々な語が用いられているが，ここでは，メジャーな語として，嘘（lie）と欺瞞（deception）の違いについて述べておく（以下，人間を想定する）。レヴァイン（Levine, 2014c）は理論の鍵概念の一つとして嘘と欺瞞を位置づけており，欺瞞とは他者を意図的に誤った方向に導くことであり，嘘とは欺瞞のサブタイプで，間違っていることが分かっている情報を言って他者をだますこととしている。欺瞞のほうがより広い概念であり，人をだますときには必ずしも嘘は必要としない。例えば，本

当のことをいかにも嘘っぽく言えば，聞き手は信じないだろう。すなわち欺瞞である。

以上，嘘と欺瞞とは厳密には異なるが，実際の論考では用語の使用についてラフなところがある。両語は相互に交換可能なもの（Vrij, 2008）として使って差し支えない。本稿では「嘘」「欺瞞」を文脈に応じて使うこととする（「本当」「真実」「正直」についても同様とする）。

実験刺激作成の困難さ

嘘研究は心理学の各領域でなされてきたが，本稿では社会心理学に焦点を当てる。社会心理学領域における嘘研究といえば，エクマンの名が広く知られている。エクマンら（Ekman & Friesen, 1969）が，社会心理学的嘘研究の端緒と言ってよいだろう。エクマンのサイトには，年代順に記載された論文リストがあり，各論文がダウンロードできるようになっているが，論文タイトルに最初に「deception」の文字が現れるのが，1969年である。患者の非言語行動から嘘が分かるのかといった臨床的関心に沿った同研究は，患者ごとにつぶさにその特徴を見ていくものであり，事例研究的でもあった。

人の行動のどこに注目すれば嘘を見破ることができるか，について明らかにするためのオーソドックスな方法の一つは，実験協力者に嘘／本当を話してもらい，それを収録して分析する，あるいは他の実験参加者に呈示し嘘／本当の判断を求める，というものである。ここで最も大事な点が実験刺激の質である。刺激の嘘が

本当に嘘である必要がある。一見おかしな表現かもしれないが、つまりは実験協力がちゃんと嘘をついていることが保証される必要がある。例えば、実際には朝食を食べてきたのに抜いてきたように話してほしいといった教示であれば、往々にして嘘をつくことへの動機づけは低く、嘘をつく必然性も低く感じるだろうから、「本当の嘘」とは言えないだろう。その点、エクマンら (Ekman & Friesen, 1974) の刺激作成は巧みである。女性の看護学生に、快適あるいはストレスフルな映像を見てもらい、感情を偽って表出させる場合 (=嘘) と正直に表出させる場合 (=本当) という二通りの刺激を作成している。ストレスフルな映像として四肢切断や深刻なやけどの治療に関する医療用ビデオが用いられたが、看護学生を対象にすることで倫理的問題の回避を意図しており、また動機づけも確保される。しかしそうであっても、刺激作成のためにあえて嘘をつくわけなので、実験設定という嘘の要素は混入しているだろうから、実生活での生々しい嘘との乖離はある。別に生々しいものでなくても、冒頭の例のような何気ない日常が垣間見られるような嘘についても、作成は難しいものである。その後もエクマンは多くの嘘研究を遂行していくが、「実験室で人びとに嘘をつかせるのがいかに難しい作業なのか、私は予想もしていなかった」という述懐が印象深い (Ekman, 1985)。嘘／本当の刺激作成は困難なのである。

筆者は、本務校で「社会心理学実験」という授業を担当しているが、グループごとに嘘／本当の刺激を作成した上で実験を遂行し、分析結果を発表するという演習を行っている。受講者はああでもないこうでもない議論し、苦労しながら刺激を作成、編集し、実験を遂行する。実験刺激作成の重要性を感じ取り、心理学研究法について考える良い機会になるとともに、嘘とは何かについて考える機会にもなっていると思われる。

欺瞞検知の正確さ

嘘を見破ることは、欺瞞検知あるいは虚偽

検出と言われる(「虚偽検出」は、どちらかと言えば、生理心理学領域で使われることが多い用語である)。多くの研究が遂行されているが、欺瞞検知の正確さについて繰り返し再現される事実は、人は嘘を見破ることが不得手であり、正答率は「50パーセントを少し超える程度」ということである。ボンドラのメタ分析によれば、平均正答率は53.98パーセントであった (Bond & DePaulo, 2006)。

「50パーセントを少し超える程度」という事実は、そもそも呈示している刺激において真偽の割合が半々であることに起因する可能性はないだろうか。レヴァインら (Levine et al., 2006) は、一連の刺激に含まれる真実の刺激の割合 (基準率: Base Rate) を変化させ、それぞれの条件下で正答率 (Accuracy) を算出しているが、線形関係が見出された (図1)。刺激において真偽を各々どの程度の割合で呈示するかということが、正答率をよく予測していることになる。これを真偽性効果 (veracity effect) という (Levine et al., 1999)。人は、実際の真偽に関わらず真実と判断する傾向を持つ、すなわち真実バイアス (truth bias) を有することが知られているが、そうしたバイアスがあるからこそ毎日の生活を適応的に送ることができるわけであって、低い正答率はある意味では当然の帰結とも言える。

人間はバイアスから逃れられない。中でも、

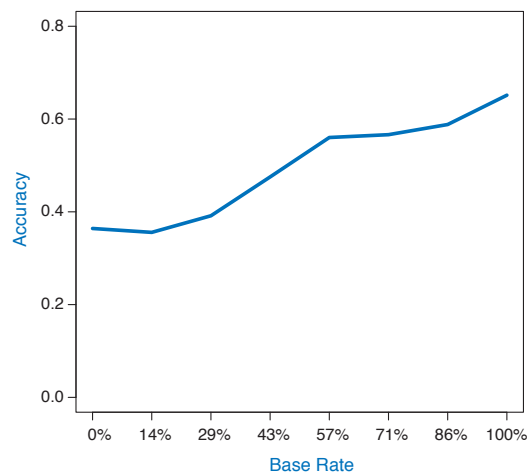


図1 刺激中の真実の割合と正答率との関係 (Levine et al., 2006)

日常生活で留意すべきこととして、確証バイアスを挙げておく。すなわち、相手を嘘つきだと思って見るとそう見えてきてしまうものである。こうしたことはポリグラフ検査においても同様であり (Ben-Shakhar, 1991)、誰しものが頭の片隅に置く価値のあることだろう。嘘は完全には見破ることができないというある種の諦念を携え、嘘を見破ることに急に自信を持たず、また相手を変に疑わず、「普通に」生活すること、これしかないのだろう。

欺瞞検知研究の実際と今後

一方で、欺瞞検知の正確さを高めるための研究は長く継続されており、発展している。グランハーグラ (Granhag et al., 2015) は、嘘を見破るための一般的アプローチとして、生理反応の測定、行動の観察、発言の分析、脳活動の測定、の4つを挙げており、さらに、嘘を見破るための確立された5つの方法として、言語行動の分析、非言語行動の分析、ポリグラフ、事象関連電位、ニューロイメージングを挙げている。各々の詳細については原著あるいは村井 (2013) などを参照されたい。以上の方法は、それを用いることで100パーセント近く見破ることができるなどというものではもちろんないが、正確さを向上させるための様々な工夫がなされている。欺瞞検知研究は、測定方法・測定対象の洗練を両輪として日々進んでおり、トレーニング効果の検討などもされている。

測定方法については、やはりニューロイメージング技術の進展はめざましい。測定対象について言えば、社会心理学では伝統的に非言語行動の検討が多い。頻繁に検討される行動もあればそうでない行動もあるが、ボンドラ (Bond et al., 2015) は、デパウロら (DePaulo et al., 2003) のデータを分析し、図2のような散布図を導いている。横軸に効果量 d (の絶対値)、縦軸に研究数 (k) をとっているが、効果が小さい行動ほど研究数が多いことが分かる (科学における一般的現象である decline effect)。今後は、研究数が少ない行動についての研究の蓄積、及び研究数が多い行動であっても刺激の精

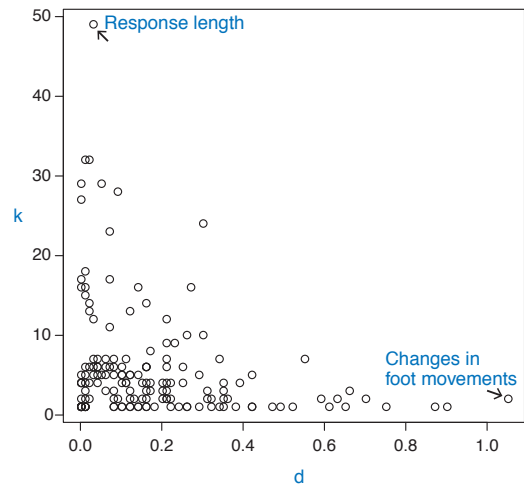


図2 効果量と研究数の関連 (DePaulo et al., 2003 のデータを用いた Bond et al., 2015 による分析)

度を高めた上での再実験、などが必要になろう。ちなみに、散布図左上の点は「返答の長さ」(効果量: -0.03, 研究数: 49)、右下の点は「足の動きの変化」(効果量: 1.05, 研究数: 2) である。

さらに今後の展開として、受動的欺瞞検知に加え能動的欺瞞検知の方向性 (Levine, 2014b)、意識的処理に加え無意識的処理に着目した欺瞞検知の方向性 (Reinhard et al., 2013) なども挙げられる。

おわりに

このところ、嘘研究が盛り上がりを見せているように感じる。昨年、2巻ものの大著が発刊されたが (Levine, 2014a)、「deception」というテーマのもと、これだけ多様なトピックがあるのかと圧倒される。一方、我が国ではヴライ (Vrij, 2008) の翻訳作業が進んでいる。そしてもちろん、本誌のような特集が組まれることも、嘘に対する関心の現れだろう。

本稿では、量的手法に基づく実証研究に焦点を当てたが、今後の方向性としては、量的手法をとらない嘘研究の充実も必須であると考えている。例えば、ある人がなぜ嘘をつくに至ったのかについて厚い記述をすることなども有用であろう。浜田 (1992) の虚偽自白に関する論考 (「悲しい嘘」) はこの点に関連する。そもそ

も、社会心理学的嘘研究の端緒たるエクマンら (Ekman & Friesen, 1969) 自体、事例研究のであったわけで、「原点回帰」の必要もあろう。

昨今、真実の究明といった旗印のもと、必要以上に嘘を糾弾する世の風潮が強くなっているように感じる。冤罪など絶対に真実を明らかにせねばならない局面においては、徹底的に真実を追究する必要があるが、そうでない局面においても過度に嘘を糾弾し制裁を加えようとする風潮があるのではないか。そんなとき、まあよいではないか、嘘、もっと頑張れ、と思ったりもする。嘘は人間臭さの表れであり、嘘あってこそその社会であるし、嘘にもっと温かい目を向けたほうがよいのではと考える。もちろん、嘘は真実がないと出てこないものであり、嘘のおおもとは真実があるわけだから、嘘を大事にすることは真実を大事にすることでもあろう。

Radical Honesty (Blanton, 2005) のように、嘘は有害なので徹底的に排斥するというのは極端かつ一面的に違いない。嘘と真実が入り交じった世界で生きているのが人間であり、嘘と真実の両方が存在することは、心の機能を支えるエネルギー源のようなものだと考える。

謝 辞

草稿について、菊地史倫先生 (公益財団法人鉄道総合技術研究所) より貴重なコメントをいただいた。記して感謝する。

文 献

Ben-Shakhar, G. (1991) Clinical judgment and decision-making in CQT-polygraphy: A comparison with other pseudoscientific applications in psychology. *Integrative Physiological and Behavioral Science*, 26, 232-240.

Bond, C. F. Jr. & DePaulo, B. M. (2006) Accuracy of deception judgments. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 214-234.

Bond, C. F. Jr., Levine, T. R. & Hartwig, M. (2015) New findings in non-verbal lie detection. In P.A.Granhag, A. Vrij & B. Vershuere (Eds.) *Detecting deception: Current challenges and cognitive approaches*. Chichester, UK: John Wiley & Sons.

Blanton, B. (2005) *Radical honesty: How to transform*

your life by telling the truth. Stanley, Virginia: Sparrowhawk Publications.

DePaulo, B. M., Lindsay, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, L., Charlton, K. & Cooper, H. (2003) Cues to deception. *Psychological Bulletin*, 129, 74-118.

Ekman, P. & Friesen, W. V. (1969) Nonverbal leakage and clues to deception. *Psychiatry*, 32, 88-106.

Ekman, P. & Friesen, W. V. (1974) Detecting deception from the body or face. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 288-298.

Ekman, P. (1985) *Telling lies: Clues to deceit in the marketplace, politics, and marriage*. New York: W. W. Norton & Company. [P・エクマン/工藤力 (訳編) (1992) 『暴かれる嘘：虚偽を見破る対人学』誠信書房]

Granhag, P. A., Vrij, A. & Verschuere, B. (2015) *Detecting deception: Current challenges and cognitive approaches*. Chichester, UK: John Wiley & Sons.

Levine, T. R., Park, H. S. & McCornack, S. A. (1999) Accuracy in detecting truths and lies: Documenting the "veracity effect". *Communication Monographs*, 66, 125-144.

Levine, T. R., Kim, R. K., Park, H. S. & Hughes, M. (2006) Deception detection accuracy is a predictable linear function of message veracity base-rate: A formal test of Park and Levine's probability model. *Communication Monographs*, 73, 243-260.

Levine, T. R. (2014a) *Encyclopedia of deception*. Thousand Oakes, CA: Sage.

Levine, T. R. (2014b) Active deception detection. *Policy Insights from the Behavioral and Brain Sciences*, 1, 122-128.

Levine, T. R. (2014c) Truth-default Theory (TDT): A theory of human deception and deception detection. *Journal of Language and Social Psychology*, 33, 378-392.

浜田寿美男 (1992) 『白自の研究：取調べる者と取調べられる者の心的構図』三一書房

村井潤一郎 (編著) (2013) 『嘘の心理学』ナカニシヤ出版

Reinhard, M. A., Greifeneder, R. & Scharmach, M. (2013) Unconscious processes improve lie detection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 105, 721-739.

Vrij, A. (2008) *Detecting lies and deceit: Pitfalls and opportunities* (2nd Edition). Chichester, UK: John Wiley & Sons. [A・ヴライ/太幡直也・佐藤拓・菊地史倫 (監訳) (印刷中) 『なぜ嘘が見抜けないのか? : 言語, 非言語, 生理指標にみる心の科学』福村出版]